

## 児童期の言語活動が書く力と読む力に及ぼす影響とその発達的变化 ―縦断調査による検討―

上田紋佳 (北九州市立大学文学部 准教授)

### 研究の背景と目的

書くことは社会生活を送る上でそれ自体が学ばなくてはならない対象であると同時に、他の能力の発達にも大きな影響を与える基盤的能力である。このような書くスキルの重要性に対し、日本において、OECD 生徒の学習到達度調査や全国学力・学習状況調査の結果から、児童の書く力の育成が大きな課題であることが指摘されている。しかしながら、児童期の書く力に関する研究は国内外において大きく不足している。本研究では児童期の書く力と読む力の相互作用および読書との関係性に着目し、その発達の変化を明らかにすることを目的とする(図1)。具体的には、縦断調査での使用に適した日本人児童向け作文課題を作成し、その課題を用いて縦断調査(追跡調査)を行い、読書が読む力・書く力へ及ぼす影響と、読む力と書く力の互いへの影響を交差遅延モデルによって検証する。

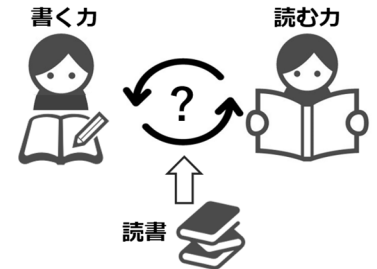


図1 本研究で着目する言語能力の枠組み

### 研究の方法

作文課題作成にあたり、カリキュラムに基づく測定(Curriculum-Based Measurement: Deno, 1985; Deno, Mirkin, & Chiang, 1982)による研究の作文課題を参考にし、説明文と物語文の2種類を新たに作成した。作文の評価方法として、質的評価では、「6+1 Trait」ライティングシステム(Education Northwest, 2018)を参考に、日本児童を対象とした作文の質的な評価方法としてルーブリックを作成した。量的評価では、文節数、漢字数などを採用した。予備調査の結果、質的評価、量的評価の両方で、学年の影響がみられ、各指標は有効にはたらいっていることが示唆された。

関東にある公立小学校小学1~5年生を調査対象とし、2021年3月(Time1)、2021年11月(Time2)に縦断調査を実施した。作成した作文課題に加えて、読む力、読書量の測定を行った。読む力の測定には、標準化されたテストである Reading-Test(福沢・平山, 2009)を用いた。読書量として、タイトル再認テスト(猪原他(2015)を一部修正して使用)を用いた。

### 結果・考察

縦断調査の結果について、近年、国際的に標準となり始めている縦断データ統計解析法である「交差遅延モデル」による検討を行い、図2の結果を得た。

書く力→読む力(青色の矢印)は、作文の質的評価(ルーブリック)のスコアが高いほど、文章理解力が高くなるという結果を示している。

読む力→書く力および読む力→読書量(オレンジの矢印)は、語彙力および文章理解力が高いほど作文の量的評価(漢字数)と読書量(タイトル再認テスト)のスコアが高くなることを示している。

読書量→書く力(赤色の矢印)は、読書量(タイトル再認テスト)が多いほど作文の質的評価(ルーブリック)のスコアが高くなることを示している。

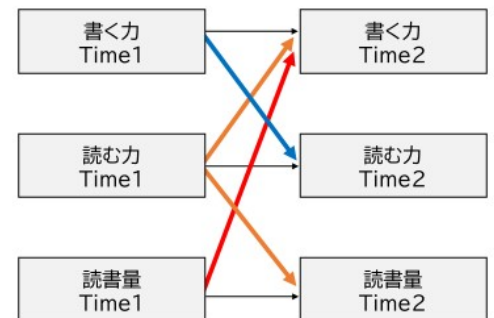


図2 縦断調査の結果のまとめ

### 研究成果および意義

本研究の大きな意義として、作文指導を、作文スキルを高めるためだけの指導としてではなく、言語力・言語活動を総合的に伸ばすための指導として捉えなおす観点を与えたことが挙げられる。例えば、作文指導により、書く力が高まれば、読む力が高まる。読む力が高まることにより、書く力と読書量が高まる。すると書く力は再び読む力を高め、読書量は書く力を高める。このような相互促進的な関係が作文指導を始点に生じる可能性があるのである。同様のことは読書指導による読書量増加を始点とする場合でも生じる。ここから、作文指導・読書指導を始点とする児童の言語能力全体を引き上げる指導方法の在り方について、その実証的基盤を提供していることが本研究最大の成果である。

今後の課題は、本研究ではサンプルサイズの問題から、各学年に特徴的な発達の傾向については検討することができなかった点である。現在継続中の縦断調査で3回目以降の測定を行い、引き続き縦断的影響を検討していきたい。

共同研究者 猪原敬介 (北里大学一般教育部 専任講師)